

# 北米ネイティブ・アメリカン史研究における理論の変遷と模索

野 口 久美子

## はじめに

一九六〇年代以降、ネイティブ・アメリカン史研究は新たな時代に入ったといえる。概観すれば、それまでの研究は、ネイティブ・アメリカンに対する白人の残虐性や連邦政府の家長主義的博愛主義に焦点を当てることによって、ネイティブ・アメリカンを歴史の消極的被害者として扱いつつながら、歴史の担い手 (Subject) としての地位から除外する傾向にあったといえる。アカデミアはネイティブ・アメリカンの「歴史語り」と彼らの視点を取り入れてこなかった。例えば現代に至るまで、多くのネイティブ・アメリカ

ンの長老 (Elder) たちが、自らの歴史をコミュニティの成員に口頭で伝承していたにもかかわらず、一九九〇年代中ごろまでに出版されたネイティブ・アメリカンに関する著書約三〇、〇〇〇冊は、その九〇%が非ネイティブ・アメリカンにより書かれたという調査がある<sup>1)</sup>。それらの著書の大部分では、ネイティブ・アメリカンはインディアン戦争やフロンティア体験の記述に登場する「未開の種族」として、もしくは、部族を守る勇敢な戦士として、あるいはポカホントラスなど白人文化との仲介者、平和の使者などとして描かれてきた<sup>2)</sup>。その過程で、ネイティブ・アメリカンを「よい人種」か「悪い人種」、さらには、いわゆる「

北米ネイティブ・アメリカン史研究における理論の変遷と模索(野口)

純血 (full blood) Ⅱ 伝統的Ⅰか「混血 (mixed blood) Ⅱ 革新的Ⅰ」かに分類し、二元論的記述をされてきたことが、一つの民族史を単純化し、多次元でのステレオタイプ化に繋がったことは、近年指摘されていることである。<sup>(3)</sup> このステレオタイプ化された像は、ネイティブ・アメリカン史研究の可能性に限界をもたらしたのみならず、北米におけるネイティブ・アメリカンの社会的イメージも偏狭なものに定着させていった。

しかしながら、一九六〇年代以降、エスニックスタディーズの勃興と、マイノリティの知識人の増加が見られ、その結果、彼らによるエスニックスタディーズの主體的解釈(エスニック・グループの構成員が、自らの文化的背景をもとに、自らの歴史、社会、文化を解釈しようとする試み)が行われてきた。それは、いわゆるメインストリートの研究者や、さらには我々海外の研究者にも理論的影響を与えてきた。以後、現代のネイティブ・アメリカン史研究の中では、既存の歴史記述が白人による「植民地化された歴史 (colonized history)」であるとし、今後は、アカデミアを先住民化 (Indigenizing) オウキである<sup>(4)</sup>と訴える新たな研究者世代が現れるまでに達した。<sup>(5)</sup> これら新たな潮流が作り出された背景には、ネイティブ・アメリカン知識人、歴史家の増加がある。彼らの知的逆襲とも取れる「ネイティ

ブ・アメリカン史の主體的解釈」の傾向は、同研究全体の新たな理論形成にも多いに影響を与えている。以下、本稿は、現代のネイティブ・アメリカン史研究に大きな影響を与えたネイティブ・アメリカン研究 (Native American Studies、以後NAS)の出現の背景と歴史的意義をふまえて、アメリカ合衆国における、ネイティブ・アメリカン史理論の変遷を整理し、同史研究の展望を提示する。

## 一 ネイティブ・アメリカン史研究における方法論の変遷

ナンシー・シューメイカー (Nancy Shoemaker) は、二〇〇二年の著書の中で、NASにおけるネイティブ・アメリカン史研究の問題点を指摘した。<sup>(6)</sup> その指摘は、一九七〇年代以来、NASの勃興に乗じて成長、発展してきた新たなネイティブ・アメリカン史という分野が、NAS自体の史料的可能性と、方法論の模索期にあるとす<sup>(7)</sup>る内容を含んでいた。二〇〇四年から二〇〇九年にかけて、カリフォルニア大学デイビス校ネイティブ・アメリカン・スタディーズ (University of California, Davis, Native American Studies) の博士課程に身をおいた筆者の経験からも、シューメイカーが、研究理論を巡り大海原に投げ出

された感を持っていた同分野の研究者、学生の混迷を代弁してくれたと感じる。

では、一九七〇年代から現代にかけての模索期の中で、ネイティブ・アメリカン史研究理論を巡り、一体どのような議論が行われてきたのか。まず、シュレーマイカーが指摘しているように、今日のネイティブ・アメリカン史研究における理論的枠組の再構築の背景には以下の二点が挙げられる。一点目に、ネイティブ・アメリカンの知識人がその議論に参加することで、歴史的事実に新たな観点からの解釈が加えられたこと、二点目に、ネイティブ・アメリカン自身の主観的歴史観を知ることのできる新たな歴史史料（西洋式歴史記述における文書資料と同様の価値を持つものとして）の有効性が認められはじめたことである。これらの変化は、むしろ、シュレーマイカーに「方法論の模索期」とされるほどの可能性をネイティブ・アメリカン史研究にもたらしたのである。

ネイティブ・アメリカンは、元来、歴史記述に口承伝承形態をとり、また「植民者（国家）」の言語文化に対する拒否感により、それまでの歴史家が研究の拠り所としてきた文書史料を残してはこなかった。ネイティブ・アメリカン史研究は、主に非ネイティブ・アメリカンにより残された文書史料（連邦政府資料やインディアン局《Bureau of

Indian Affairs》による調査レポートなど）を用い、統治する側の視点で、かつ西洋（もしくはいわゆるホワイト・アングロ・サクソン）中心主義的なアメリカ史記述態度と理論的枠組みの内側で行われてきた傾向がある。その中では、歴史研究者がネイティブ・アメリカンの主観的意見を取り入れることは困難であった。いわゆる「旧インディアン史」とも呼ばれる旧来の記述形態である。

「旧インディアン史」は、アメリカ西部史の一部として記述されてきた。地理的、また概念的條件としての「アメリカ西部」を扱ってきた西部史は、「明白な運命 (manifest destiny)」として西部の自然を克服する開拓者としての白人と、身体的、概念的にも自然の一部とされ、よって開拓者が克服すべき対象となるネイティブ・アメリカンとの関係を基本軸の一つとしている。これは、フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederic Jackson Turner) が、アメリカ史を地理的拡張の歴史、もしくはフロンティアの歴史を、ヨーロッパ文明と、「未開、野蛮」なネイティブ・アメリカン文化との境界線の西進運動として説明してきたフロンティア史家に負うところが大きい。つまり、ネイティブ・アメリカンに対する記述は、西部史の中で、西洋文明が一括りにした「ネイティブ・アメリカンのもの」、つまり「自然・野蛮・未開」の概念と、「西洋文明」との二元対立

の中で構築されてきたといえる。

また「旧インディアン史」は、社会進化論を基礎として、歴史記述に「人種／発展的ヒエラルキー」の正当化をもたらした西洋式歴史認識の一形態といえる。一九世紀後半から二〇世紀初頭における社会進化論の広がりとともに、ネイティブ・アメリカンの文化や伝統は、西洋のそれらよりも、「科学的根拠」の名の下に、劣るものとされた。さらに、社会進化論における自然淘汰の原則に従って、ネイティブ・アメリカン文化は消え行く運命にあるとされ、一方で、ロマンテイサイズされたネイティブ・アメリカン像が提示された<sup>15</sup>。後者のような回顧主義の背景には、二〇世紀末よりラスト・オブ・モヒカン (*Last Of the Mohican*) やダンス・ウィズ・ウルブス (*Dance With Wolves*) などの娯楽映画、音楽におけるネイティブ・アメリカン文化のステレオタイプ化も影響している。アメリカにおける産業の発展や都市化の進行に伴い、ネイティブ・アメリカンの「高貴なる野蛮」のイメージは、一方で古き良きアメリカを体現するものとなったのである。ネイティブ・アメリカンについて記述する歴史家は、二元論や二つの社会、人種間に引かれた明確な一本の境界線に基づいて、フロンティアの歴史の中にネイティブ・アメリカンを組み込むというアプローチから、人種のランク付けによる社会進化論へと理論を変えて

いった。一方で、それはネイティブ・アメリカンを人種として歴史の表舞台に立たせながら、その劣等性を強調するという差別主義へと転換を図ったとみることができるのである。ロバート・ヘイザー (*Robert Heizer*) によるカリフォルニアのネイティブ・アメリカンについての研究で提示されているように、ネイティブ・アメリカンの劣等的イメージと、それに対するカリフォルニア移住者の差別的、また後見の態度が、ネイティブ・アメリカンの強制労働を可能にする思想的、ヒエラルキーの正当性を作り出した例すらある<sup>16</sup>。

しかしながら、市民権運動に象徴されるような、一九六〇年代から七〇年代にかけてのアメリカ合衆国における社会的、政治的変動は、大衆の関心をマイノリティの声に大きく耳を傾けさせることになった。アメリカ社会において、マイノリティの文化を学ぼうとする気運が高まり、歴史学のあり方自体も修正を迫られた。アメリカの高等教育では、そのカリキュラムに先住民の歴史、文化に関する授業が取り入れられるようになり、結果として一九八五年までには一〇七の大学でネイティブ・アメリカン研究（もしくはアメリカン・インディアン研究）学科 (N.A.S.) が開設された<sup>16</sup>。

同時期のN.A.S.の発展には、一九六〇年代における過激

派ネイティブ・アメリカンによる抗議に端を発したレッドパワー (Red Power) 運動の盛り上がりや、歴史家トナルド・フィクシコ (Donald Fixico) が「インディアン・アカデミック・ウォーリヤー (Indian Academic Warrior)」と呼ぶような、ネイティブ・アメリカン知識人の増加を指摘することができ<sup>17)</sup>。彼らは、ネイティブ・アメリカンが、アメリカ史、もしくは、アメリカ西部史の一部として従属的に語られるのではなく、自らの社会的復権のためにも、ネイティブ・アメリカン自身を中心に据えた新たなネイティブ・アメリカン史の中で語られるべきであると説いた。その方法として、ネイティブ・アメリカン・コミュニティの非文書史料である有形、無形文化財が歴史史料として用いられるべきであるとしたのである<sup>18)</sup>。

ネイティブ・アメリカン知識人の間での歴史観も、決して一枚岩ではない。しかしアメリカの社会運動とネイティブ・アメリカン研究者の増加を背景とした、こうしたいわばネイティブ・アメリカン史の修正主義的観点は、確実に、非ネイティブ・アメリカンの歴史家、さらには、ネイティブ・アメリカンを取り上げるアメリカ史研究者の意識改革につながってきた。例えば、彼らは、歴史的事実や事象に対する研究視点を変えるに止まらず、歴史史料の新たな可能性にも目を向けた。後に述べるように、本来ネイティブ・

アメリカンが後世に歴史を伝える手段としてきたオーラルヒストリー、(口伝) 説話、(口伝) 神話、その他の民俗学的史料を取り入れることによって歴史史料の可能性は格段に広がった。ネイティブ・アメリカン史研究は、こうして、アメリカ史研究、そしてNASの中で、新たな歴史理論実践の場となっていくた。

## 二 ネイティブ・アメリカン史記述におけるエスノ ・ヒストリー (Ethnohistory)

次に一九七〇年代以降の、ネイティブ・アメリカン史の歴史記述をめぐる、新たな方法論について時代を追ってみていく。ネイティブ・アメリカン史修正主義における、最も古く、かつ効果的な方法として、エスノヒストリーに基づく方法論がある。エスノヒストリーとは、文化人類学者、歴史学者により用いられる用語であるが、その定義をめぐっては、未だ議論が継続している<sup>19)</sup>。エスノヒストリー学会 (The Association of Ethnohistory) は、一九五〇年代より雑誌『エスノヒストリー』(Ethnohistory) を刊行し、エスノヒストリーの研究手法を世に広めた。その中心的担い手、ジェームズ・アクステル (James Axtell) よれば、エスノヒストリーは民俗学的に定義された文化、もしくは

文化群における変化、変遷の理由、その性質を明らかにするため、民俗学的、歴史学的方法と史料を用いる学問である。さらに、アクステルは、エスノヒストリーは文化人類学の研究方法を取り入れ、調査対象の文化をそれぞれの社会、経済を構築する本質的な要素とみなす、とした<sup>20</sup>。

よって、エスノヒストリーという方法論を用いたネイティブ・アメリカン史研究では、その史料分析過程において、対象とするネイティブ・アメリカン文化に十分な考察を加えることが求められる。アクステルによれば、文化とは「ある社会の構成員によつてそれぞれ共有されている、思考方法、価値観、規範などの一つの形態であり、文化は遺跡、言語、社会構造というような、そのグループの先天的行動 (non-instructive behavior) や、彼らのその行動の象徴的生産物 (symbolic products) から推定できるものである」とする。エスノヒストリーは、「そのリサーチと分析の初段階において、文化全体を学ばなければならず、それゆえに、すべての民俗史学者は、あたかも「生まれたての子供のように」(精神的、口語的、身体的な) 言語を習得しながら、各々の研究対象である文化に入っていかなければならない、とアクステルは主張した<sup>21</sup>。

それまでも、非文書史料の使用は、社会史研究の中ですでに実践され、その歴史史料としての妥当性、使用方法

などが議論されていた。以後も、進化論的、決定論的態度や、歴史が事件史として構成されてきた起源論、系譜論に依存しがちであった歴史学に対する実証主義的批判とともに、非文書史料をめぐる新たな歴史記述の試みは、いわば歴史学の分野の一つの新たな潮流となつていった。同時に、「文化」理解を前提条件とするエスノヒストリーの登場は、それまでのネイティブ・アメリカン史研究の方法を刷新した。

ネイティブ・アメリカン史研究では、少なくとも以下三種の非文書史料が取り入れられた。それらの史料とは、(一) 言語、(二) 神話、歴史、物語などの言い伝えや記憶、(三) 地名、領土、人口移動、戦い、経済活動、さらには聖地などの地点や地域、区画が地名として記憶されている様々な形態の地図(土地の印)である。これら三種の史料はネイティブ・アメリカンの生活、文化をよりよく理解するのに必要かつ、有益な史料であり、それらは、他の文書史料とともに用いられる必要がある、と研究の視野拡大にアクステルは言及している<sup>22</sup>。

しかしながら、ネイティブ・アメリカン史研究の方法論としてのエスノヒストリーに対する批判点も提示されている。第一にエスノヒストリーは、人種、民族の違いというものを経成事実とし、ネイティブ・アメリカンと非ネイティブ

ブ・アメリカンとの差異を歴史問題の根源としてきた。つまり、ポストモダンの観点から、「文化」という、特徴化、数値化が不可能な、かつ「他」文化（もしある特定の文化が『個』として存在するのであれば）との線引きが困難である「包括的」現象を扱いつつ、学問としてのエスノヒストリーは、実際には「排他的」なのである。つまり、「文化」という「規定できない流動的現象」を扱いながら、「文化規定」「文化の権威付け (Authorization)」が求められるからである。結果として、エスノヒストリーの理論は、ある一つの異文化や小部族に焦点をあてることによって、彼らの文化を特徴化し、より大きなカテゴリーの中の一つとして位置づけ、名前付け（例えば、ハイフン（―）を用いたカテゴリー化とステレオタイプ化）をもたらしことになる。

また、一九八〇年代末より、ネイティブ・アメリカン史研究におけるアイデンティティの「境界線」の消滅に関しても言及されるようになってきた。「何パーセントのネイティブ・アメリカン」を規定する従来の連邦政策や、法政策に比べ、ネイティブ・アメリカンと自認する人の増加は、ネイティブ・アメリカンである条件に修正を迫った。結果として、いわゆる「都市インディアン」の増加、また部族文化の変質、流動化、消滅、そして再生は「何が伝統文化か」

との問いかけや、「他者」との区別に実質的な意味をもたせなくなつた。ネイティブ・アメリカン社会内外の脱境界線を取り上げたリチャード・ホワイト (Richard White) の『ミドル・グラウンド (Middle Ground)』やジェームス・メルレル (James Merrell) の『インディアンの新世界 (Indians' New World)』は、明白な白人対インディアンの境界線ではなく、アイデンティティや文化の混ざり合った、曖昧な人種関係を構造化した研究であり、ここでは、人種、民族の境界線が曖昧であること、そのような境界線が本質的には崩壊しているという見解を提示した。ホワイトやメルレルが示唆しているのは、あらゆるレベルの「世界」「文化」「アイデンティティ」という概念は破壊と再構築を繰り返しているという点である。つまりネイティブ・アメリカンと非ネイティブ・アメリカンの社会は変動する世界に所属し、両者の関係、歴史は、その社会変動の結末なのである。結果として、ネイティブ・アメリカン史記述では、部族、氏族、さらには民族単位ではなく、より個別研究化し、コミュニティレベル、個人レベルでの研究が求められるようになった。

第二に、エスノヒストリーにおける問題関心は、多くの場合において地域研究、個別研究に帰する傾向にあり、広域、国家レベルの社会構造、さらに、世界的な視点を持って、

ネイティブ・アメリカン社会を植民地化した帝国主義社会とその構造、さらには、それらの社会と先住民との歴史的関係に焦点が当てられることは稀であった。加えて、資本主義やグローバリゼーションといったネイティブ・アメリカンが現在おかれた、社会的、経済的状况を説明するという研究目的を達成することは困難であるとの批判が出された。

### 三 「新インディアン史 (New Indian History)」

旧インディアン史に対抗する方法論として、エスノヒストリーとともに、「新インディアン史」が一九七〇年代にロバート・バークホフアー (Robert Berkhofer) により提唱された。それは、エスノヒストリーの一つの潮流として、アメリカ史研究における「新西部史 (New Western History)」の議論の中で発展し、歴史史料議論を超えた、方法論と新たな歴史観を提示した。

一九八七年に刊行されたパトリシア・ネルソン・リメリック (Patricia Nelson Limerick) による『征服の遺産 (The Legacy of Conquest)』以来、新西部史家は、アメリカ西部史理解に、ジェンダーやエスニシティーの観点を取り入れる必要性を唱えてきた。例えば、同史観は、男性だけでなく、

西部における女性独特の役割に焦点を当てるようになり、従来の歴史構築の担い手であった白人、アングロサクソン、かつ、プロテスタント、男性、などだけではなく、アメリカ西部を構築する成員としてのあらゆる民族グループの動向を研究対象とした。さらに新西部史の議論は、西部を構成する成員としてのネイティブ・アメリカンに、新たな焦点を当てた。その背景には、アカデミアのみならず、映画などアメリカ大衆文化におけるネイティブ・アメリカン文化への増大する関心や、ネイティブ・アメリカン自身による自文化の再構築などが存在する。アメリカ (西部) 史記述における多文化主義的な視点への転換は、「長きにわたって焦点を当てられることのなかった、かつダイナミックな」ネイティブ・アメリカン文化に、研究者の関心を引き付ける大きな契機となったのである。

バークホフアーはそれまでのネイティブ・アメリカン史研究を批判的に回顧し、同研究に従事する研究者は、ネイティブ・アメリカンと白人との関係や、ネイティブ・アメリカン政策における政府、議会内抗争にはかり焦点を当てているとした。同時に、バークホフアーは、研究者はネイティブ・アメリカンの主体的意見を歴史に取り入れ、アイデンティティ・ポリティクスや、部族間関係、部族の内部対立などを通して、「白人と対立する社会・文化」として



ではなく、ネイティブ・アメリカンを中心としたテーマに関する議論を深めるべきであるとしている。

また結果として、新インディアン史はエスノヒストリーと同様に、ネイティブ・アメリカン史に新たな研究テーマを提唱することになった。例えば、インディアン戦争、戦争捕虜の扱い、寄宿学校におけるネイティブ・アメリカンの経験、フロンティアにおける土地収奪、ネイティブ・アメリカンとネイティブ・ハワイアンの歴史経験に関する比較研究、保留地における天然資源保護と環境問題などはその代表的なものであり、さらには、部族、地域研究などにもその関心が広がっている。ウィリアム・ヘーガン(William Hagan)が「新インディアン史観はエスノヒストリーの議論の中から生まれたのである」とも指摘しているように、先行していたエスノヒストリー論者は、その歴史史料に革新をもたらしたと同時に「新インディアン史」の中心的担い手となった。非文書史料に焦点を当てたエスノヒストリーに対して「新インディアン史」は歴史学の研究テーマとしてのネイティブ・アメリカンに新たな注目を集めた。

しかし、ネイティブ・アメリカン史研究における新たな方法論である新インディアン史についても、いくつかの批判点が提示されている。『ネイティブとアカデミア(Native and Academia)』において、デボン・A・ミヘシユア(Devon

A. Mihesuah)は、新インディアン史観を提唱する多くの研究者が、史料(特にネイティブ・アメリカン側から提示される史料)を使用するに足る対話を、部族の人々との間に持っていない、としている。その点について、自身がチョクトー族の歴史家であるミヘシユアによれば、新インディアン史観は、新たな史料、研究テーマへの挑戦が、ネイティブ・アメリカンと歴史研究者の距離を縮める効果がある一方、特に、学会の主流(mainstream academia)においては、その態度が未だ軽視されがちであるとされる。その善後策として、ミヘシユアは、同著作の中で以下の三点を強調している。一点目に、ネイティブ・アメリカン史研究は、部族の人たちと会話形式の対話の中で書かれなければならない、二点目に、同史はNAS研究者(特にネイティブ・アメリカン知識人)の視点に、より多くの注意を払う必要がある、三点目に、ネイティブ・アメリカン史記述は部族コミュニティの発展に有益でなければならない。これらの見解は、今日に至るまで、部族と密接なかわりを持ち続けている一部のネイティブ・アメリカン史家らによって堅持されている。

北米ネイティブ・アメリカン史研究における理論の変遷と模索（野口）

#### 四 ネイティブ・アメリカン研究の中のネイティブ・アメリカン史研究

一九九〇年代後半以降は、より本質的なネイティブ・アメリカン史の再考をネイティブ・アメリカン史研究全体に迫ったといえる。その背景には、NASの発展とネイティブ・アメリカンの知識人の増加がある。一九八〇年代以降のネイティブ・アメリカン研究(NAS)の設立と発展は、ネイティブ・アメリカン史研究にも大きく貢献した。高等教育機関では多様なNASプログラムが組織され、主要大学において、ネイティブ・アメリカン・スタディーズ(NAS)／アメリカン・インディアン・スタディーズ(American Indian Studies, AIS)や関連機関が設立された。同時に、部族が独自のカリキュラムに沿って運営する部族大学も増加した。部族学校は二〇〇二年までに三四校が設立されている。

NASは、先住民の批判的理論(Indigenous Peoples Critical Theory, ICT)に基づいて、ネイティブ・アメリカンの社会、文化、経済、政治、芸術を再解釈しようとする学問である。植民地主義が先住民にもたらした精神的、構造的影響は、アルバート・メミン(Albert Memmi)やフランツ・ファノン(Franz Fanon)が分析したコロニアル

ディスコース(植民地的思考、Colonial Discourse)によって、問題視され、研究対象とされた。ここでは、植民地建設の過程を通して、更に植民地崩壊以後も、西洋世界観がいかに先住民(Indigenous People)と部族社会を持つ、多様な政治的、経済的、領土的、歴史的、文化的構造を破壊し続けてきたかが述べられている。

主要な担い手であるネイティブ・アメリカンの研究者によれば、北米NASは、コロニアル・ディスコースからの脱却を目的とする南北アメリカ大陸でのネイティブ・アメリカン・レジスタンス運動(例えば、一九六〇年から一九九〇年までのアメリカン・インディアン・ムーブメント(American Indian Movement)、民族自決運動(Sovereignty Movement)、マヤのザパティスタ運動、エクアドルの蜂起、ボリビアの反社会主義運動など)の一部であると規定する。一方、レジスタンスの金字塔となったのは、アメリカ以外の先住民の視点であった。二〇〇四年、ニュージールランドのマオリを事例に、自身もマオリであるリンダ・トゥヒワイ・スミス(Linda Tuhiwai Smith)が「脱植民地理論(Decolonizing Methodologies)」を同名の著書で体系化した。スミスによれば、脱植民地理論は、西洋式の価値観や学問形態に「支配」されてきた先住民研究から脱却し、先住民の認識論(Epistemology)に基づいた学問

的転換の試みであるとする。スミスは、脱植民地理論を、非ネイティブ・アメリカンによって残された史料を用いて、彼らの視点で書かれた歴史記述から脱却する手段であると見た。<sup>39)</sup>

NASは、ネイティブ・アメリカンの大学進学率や、ネイティブ・アメリカン知識人の増加により発展していった。これらの機関の中で活躍する、ネイティブ・アメリカン知識人の思想的傾向は多様であるが、その増加は、確実に部族社会とネイティブ・アメリカン史研究者の距離を縮め(正しくは、研究者は距離を縮める必要に迫られ)、新たな研究理論を作り出した。例えば、イネス・ヘルナンデズ・アビラ (Ines, Hernandez-Avila) は、NASは主に超域研究として、ネイティブ・アメリカンを、彼らが属する個々のコミュニティとの関係の中で理解するための、歴史的、経済的、社会的、文化的枠組みを提供する場であるとしている。<sup>40)</sup> また、歴史家ステイブン・クラム (Steven Crum) は、自身の属するウエスタン・シヨシヨニ族の部族史をまとめた『我がが踏みし道』(The Road On Which We Came)の中で、ネウエ (The Newe: Western Shoshone) は他の平原インディアンとその歴史的類似性を持つが、部族員の経験は多岐にわたり、平均的な、かつ典型的な部族史を語ることは不可能であると述べている。カリフォルニア大学デ

イビス校のNAS (学部) に属するこれら二人の研究者の言及からもわかるように、ネイティブ・アメリカン史は、対象とするネイティブ・アメリカンと彼らが帰属するコミュニティとの結びつきの中で記述されるべきであり、またそのコミュニティの多様性を前提とするとされた。<sup>41)</sup>

また、特に部族と強い結びつきを持ち、先住民ナショナルイズム (Indigenous Nationalism) もしくは部族ナショナルイズム (Tribal Nationalism) を唱えるネイティブ・アメリカンの知識人により、NASやネイティブ・アメリカン史研究は、ネイティブ・アメリカンの民族自決 (Sovereignty) を支持し、実践する場となっていた。ラコタの政治学者エドワード・バランドラ (Edward Valandra) の実証主義研究にみられる、20世紀連邦ネイティブ・アメリカン政策の批判 (インディアン再組織法《The Indian Reorganization Act》批判、連邦政策終結政策《The Termination Policy》批判) などは、現代ネイティブ・アメリカン社会における部族アイデンティティの健在を示し、ネイティブ・アメリカン知識人などによる部族の政治的、経済的、文化的つながりを強固にする部族の自治、自決にむけての取り組みを示している。<sup>42)</sup>

また、ネイティブ・アメリカン知識人は「歴史観」に關して、ネイティブ・アメリカンと非ネイティブ・アメリカカ

ンの根本的差異を指摘している。歴史家ドナルド・フィクシコは、「伝統的」な部族社会とかわりながら生活するネイティブ・アメリカンの世界観は、「直線的 (Linear)」ではなく「円形 (Circle)」であるとす。フィクシコ曰く「円形」的な世界観とは、「あらゆるものがこの世界で関連し合う、周期 (Circle) と循環 (Cycle) が世界の中心である」ということを強調した見方」である。部族社会と密接な関係を保つネイティブ・アメリカンの歴史家にとって、時系列にそった事件史ではなく、時系列を越えた、人、自然、超自然のつながりを描くことが、歴史記述のあり方であるとした。

さらには、ピーター・ナボコフ (Peter Nabokov) はネイティブ・アメリカン文化を中心に据えたネイティブ・アメリカン史観と、これまでアメリカ史が拠ってきた西洋文化における歴史観とは全く異なるものであると指摘している。ナボコフは、森林と木のメタファーを用い、西洋文化における歴史モデルは、「多くの異なる枝葉の付いた、『西洋史観』という一本の木」であるとする。それはつまり、歴史自体が、西洋的な歴史主題を共有した異なる事例の集合体であるとする。しかし、ネイティブ・アメリカンの歴史モデルは「多種多様な木々の集まり」であるとした。そこでは、個々の独立した文化の集合体が独自に過去を解釈

し、記述する過程で、西洋的歴史主題は多数の中（幹）の一つでしかないことになる。ナボコフは歴史記述における「ヨーロッパモデル」と「インディアンモデル」を分離させるアプローチを提示したのである。またジェンダーの視点から、ネイティブ・アメリカン史に独自のアプローチを試みたアンドレア・スミス (Andrea Smith) は、「ネイティブ・アメリカンにとって、性差別との戦いは、民族自決のための戦いと関連している」と説いた。母系性をとる多くのネイティブ・アメリカン社会において、民族自決を遂行し、部族ナシヨナリズムへ回帰する努力は、男性中心社会の性差別から脱却する有効な手段であるとした。NASはこれらネイティブ・アメリカンの知識人が、それまで抑圧されてきた独自の歴史観、世界観を提示することのできる、新たなレジスタンスの場となったのである。

このように、現代におけるNASの興隆と、その影響を多大に受けたネイティブ・アメリカン史研究においては、「脱植民地」、「民族自決」、「部族ナシヨナリズム」など、西洋社会と、植民地主義に対する政治、経済、文化的レジスタンスが、大きな研究目的となっていることは確かである。それに向けての方法論や理論は、個々のネイティブ・コミュニティや歴史家により多様である。ここでは、エスノヒストリーや新インディアン史から提示された新たな史

料の可能性を実験しながら、先住民の歴史観、世界観、そして歴史のスタンスを十分に反映させたネイティブ・アメリカン史の必要性が提示されてきた。

## まとめとして — 現代ネイティブ・アメリカン史研

### 究における理論、限界と可能性

研究分野における理論の重要性は、本来、西洋的学問形態から沸きあがったとする見方がある<sup>⑤</sup>。歴史を西洋式学問形態で解釈しようとする試みが理論に帰結し、その結果が歴史解釈における二元論であり、また勝者の歴史観である<sup>⑥</sup>ととらえることも可能にする、という考え方である。ネイティブ・アメリカンがいわゆる「西洋史」に登場するのは植民地主義時代からであり、植民地主義の歴史は、征服する人、征服される人／原住民と非原住民（移住民）／先進国と発展途上国／知識人層と非知識人層という二元論的考察に基づく歴史認識で表されてきた。二元論的歴史記述は、人類における権力、富の不平等分配を正当化するのに有効な手段とされたのである。一方、ネイティブ・アメリカンの多様性と、彼らによる歴史の主體的解釈、さらには、ネイティブ・アメリカン文化の多様性、歴史認識形態の差異、さらには、ネイティブ・アメリカンが持つ独自の歴史観を

考慮した場合、シューメイカーが問う理論、つまり特定の法則をあてはめた「出来事の再構築」は必要なのか、との疑問がおこる。このことから、新たな理論がネイティブ・アメリカン史研究に導入されるとき、理論の正当性や必要性自体が議論される必要に迫られるのである<sup>⑦</sup>。

これは、一九八〇年代にはネイティブ・アメリカン史における世界システム論やマルクス主義的解釈が、理論としてネイティブ・アメリカン史研究の中で発達しなかった所以でもある<sup>⑧</sup>。ミヘシユアが指摘するように、これらは「借物の理論（インディアン研究の外で発展した議論）」であること、従って、ネイティブ・アメリカンがそれぞれに体験した個々の歴史や、ネイティブ・アメリカンの主体性を含めたより多様性を持った歴史観をネイティブ・アメリカン史に含めるには、方法論として不十分だったのである<sup>⑨</sup>。

一方で、現代のネイティブ・アメリカン史研究における、脱植民地理論と、多様化に対する積極的主張は、過去の二元論的歴史観に基づく、ネイティブ・アメリカン史研究に対するネイティブ・アメリカンからのレジスタンスとして構築されたものである。その中で、ネイティブ・アメリカン史研究の今後の方向性に関して検討してみると、現在進行形のネイティブ・アメリカン史研究は「過去の功績と、アクティビズムとの賜物であるが、まだ依然として五里霧

中である」とフィリップ・デロリアが、言及しているように、レジスタンスを超えた、学問的可能性と、方法論や史料の体系化を含めた理論化に関する議論がまだ不十分である、といわざるを得ない。まず、新しいネイティブ・アメリカン史が、彼らの経済的、社会的、文化的抑圧へのレジスタンスの形であるとするならば、このレジスタンスを、アカデミアにおける長期的研究理論として発展させるのは無理であろう。その理由としては、近年における、一部のネイティブ・アメリカン社会の経済的成功と政治的発言権の増大も含めた、ネイティブ・アメリカン社会の多様化がある。

その中でネイティブ・アメリカン史研究が直面している状況をあげてみると、一点目に、研究者とコミュニティとの距離感についての問題がある。これは、必然的に「誰がネイティブ・アメリカン史を研究できるのか」という問題と切り離せない。物理的な可能性に加えて、閉鎖的ネイティブ・アメリカン・コミュニティに関する歴史研究は、その構成員、もしくはコミュニティとの頻繁な接触が可能である者に限定せざるをえない。よって、ネイティブ・アメリカン史研究者は、「誰に向かつて、どのような理由で同史記述にたざさわるのか」といった、研究者のアイデンティティにかかわる本質的問いかけが必要とされる。そ

の過程で研究者は、コミュニティ、さらには情報、史料提供者としてのインフォーマント (Informant) との距離感を明確化することが求められるであろうし、一方で、研究対象やネイティブ・アメリカンコミュニティに対して、当然ながら自らの研究の責任 (コミュニティの持つ情報、知的財産を公開することに対する責任) を伴っていかねばならない。これは、「ネイティブ・アメリカン不在の歴史」から、ネイティブ・アメリカンとともに作られる、新たなネイティブ・アメリカン史の発展にもっとも必要なプロセスである。

また、二点目に、ネイティブ・アメリカンの研究者と非ネイティブ・アメリカンの研究者との距離感である。学問とコミュニティとの連携を唱える N.A.S と、その中で発展してきたネイティブ・アメリカン史研究の中心的担い手は、明らかにネイティブ・アメリカンの知識人であり、歴史家である。一方、「よそ者は何も分かりえない」という一部のネイティブ・アメリカン知識人の閉鎖的態度に対して、非ネイティブ・アメリカン、もしくは私を含めた外国のネイティブ・アメリカン史研究者による多様な議論展開が求められる。この議論は、レジスタンスの結果として生まれた現在のネイティブ・アメリカン史研究が、本来のアメリカ史学、もしくは歴史学にいかにかアプローチしていけ

るのかという問題を内包している。具体的な問題として、非ネイティブ・アメリカン研究者はネイティブ・アメリカン社会といかにかかわることが可能であるのか、IPCTのとらえる「非先住民的な世界観」と「先住民的世界観」を、主要大学の研究機関を中心とした学会活動の中で、いかに融合させていくか、という点での議論が必要となる。

その突破口として、研究対象とするネイティブ・アメリカンのアイデンティティの多様性に、一層厳密に言及する必要があるであろう。フィリップ・デロリアが「Postmodern ambiguity」と表現し、サンディー・グランデ (Sandy Grande) が「Free-Floating」と表現した、現代のネイティブ・アメリカン社会におけるアイデンティティの自由変質、もしくは、彼らの「主体性 (Subjectivity)」は、現代、過去のネイティブ・アメリカンの辿った歴史を理解するうえで、有効な理論となりうる。一方、都市化の進行と、部族ナショナルリズムが並存している現代のネイティブ・アメリカン社会を理解するには、アイデンティティの「曖昧さ、多様性」を受け入れるだけではなく、「アイデンティティ・パラドックス (Identity Paradox)」という問題と向き合うことが必要とされる。つまり、ネイティブ・アメリカンコミュニティは、流動的な「Indian-ness」を受け入れることによりコミュニティを維持できる様々な現象

(例えば、人種主義、性差別主義、同性愛差別、脱部族主義、都市化) と、より厳密な「Indian-ness」を維持することで防げる外部的脅威 (部族の拡張、エスニック・フロード *Ethnic Fraud*)、部族文化の商品化、そして文化喪失) という、矛盾を抱えることになるのである。<sup>51)</sup>

例えば、ネイティブ・アメリカン・アイデンティティの多様性は、レジスタンスの目的としてネイティブ・アメリカンの中で共有されてきた「民族自決」の考え方に對する違いにも表れている。アルフレッド・タイカイキ (Alfred Tarkai) などのように、現代の民族自決は「不適切な概念 (inappropriate concept)」であるとし、ネイティブ・アメリカン知識人によるレジスタンスに新たな批判を提示する研究者もいる。アルフレッドは、これまで叫ばれてきた「民族自決」と「部族自治」は、西洋社会における「国家」の設立と同一視されていると批判する。アルフレッドによれば、民族自決とは、アメリカ国内に西洋的国家を設立することではなく、「絶対的権威はなく、決定に関する強制権もない、階級はなく、党派的な分離傾向もない」ネイティブ・アメリカン独自の思想、世界観、言語使用を実践する場であるとする。一方でアルフレッドの批判する現代の民族自決とは、一九三四年のインディアン再組織法以降、アメリカ社会における法的、政治的、文化的枠内にお

いて、連邦政府主導により行われてきた限定的自治（西洋式意思決定機関としての部族政府）への批判にあることは明らかである。アルフレッドの民族自決に対する批判は、レジスタンスに関してネイティブ・アメリカン知識人の間における温度差を示し、ネイティブ・アメリカン史研究、さらにはNASが新たなレジスタンスと「民族自決」の意義、方法を再考する時期にきていることを暗示している。

個々のネイティブ・アメリカン・アイデンティティの問題だけではなく、ジャック・フォーブズ (Jack Forbes) は、研究トピックとしての境界線の見直しと「脱境界観点 (Transborder Perspective)」を訴える。カナダとメキシコの境界線付近のネイティブ・アメリカンを対象としながら、国境をまたぐ多くの部族に関心を払っていないこれまでのネイティブ・アメリカン史研究に対して、フォーブズは、ネイティブ・アメリカン史に適用されてきた地理的境界とは、植民地主義の結果としての国民国家の設立により人工的に設立された境界線であるとし、国境を越えて流動するネイティブ・アメリカンの動きに注目すべきであるとする<sup>⑧</sup>。例えば、経済活動を求めてカリフォルニアに移住してきたメキシコのマヤが、同地で新たな部族アイデンティティを形成していく過程を歴史的に述べた、人類学者ステファノ・ヴァレッセ (Stefano Varese) の研究に見られる

ように、脱境界の理論は、地理的、アイデンティティの境界線を事実上消滅させ、多次元でのアイデンティティ研究を発展させるであろう。

以上、ネイティブ・アメリカン史研究理論の歴史的変遷と、現状に関して述べてきた。現代のネイティブ・アメリカン史研究は、研究者による植民地主義に対するレジスタンスの場としての役割を担ってきた。同時に、研究者のアイデンティティは歴史研究の内容、方法、可能性に大きく影響し、ネイティブ・アメリカン知識人間、もしくは、彼らと非ネイティブ・アメリカン研究者間における、歴史理解への差異を作り出していることも事実である。最後に、著者の意見を付け加えるのであれば、そうした「暗中模索」を切り抜ける方法として、ネイティブ・アメリカン史を、これまで以上に世界の「先住民史」の中で見るといふ視点への転換も必要であると考える。ネイティブ・アメリカン史研究が、「植民地主義に対するレジスタンス」をその大きな目的の一つとするならば、我々は、ネイティブ・アメリカン史研究を、北米におけるネイティブ・アメリカンの歴史の中で終結させるべきではない。（それは同研究が単なる「部族中心史観」に陥るのを防ぐことにもなる）。批判を覚悟で言えば、北米において「先住民」が経験した個



別の法的、政治的問題を当然視野に入れながらも、ネイティブ・アメリカンと同様、植民地政策による土地や資源の収奪や文化の破壊、諸権利の剥奪による迫害を体験し、その中で、適応とレジスタンスを経験した他の国、地域との先住民史との比較研究がより一層必要になるのではないか。それは「レジスタンス」と歴史記述が、一地域史として終わらせられるべきではなく、「世界史」へとより広く還元されていくべきものであると考えるからである。

注

- (1) Donald L. Fixico, ed. *Rethinking American Indian History* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1997), 3. 現在、使用される文脈、背景により、北米先住民をさす言葉として、Native American, Indigenous People, American Indian, First People, 特定の部族名など、様々な呼称が適宜用いられている。ここでは、ネイティブ・アメリカンの法的、文化的、地域別差異の言及を避け、理論的枠組みの議論に終始するため、現代アメリカ社会において一般的に使用されているネイティブ・アメリカン (Native American) を用いる。
- (2) Philip Deloria, "Historiography" in Philip Deloria and Neal Salisbury, eds., *A Companion to American Indian History* (Blackwell Publishing, 2004), 9-10.

史苑 (第七〇巻第一号)

- (3) フランシス・ジェニングス (Francis Jennings) は、これらの二項対立は西洋諸国による植民地政策に起因した考え方であるとす。Francis Jennings, *The Invasion of America: Indians, Colonialism, and the Cent of Conquest* (Chapel Hill: University of North Carolina Press for the Institute of Early American History and Culture, 1975), 6-12.

- (4) Devon Abbott Mihesuah and Angela Cavender Wilson, *Indigenizing the Academy: Transforming Scholarship and Empowering Communities* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2004).

- (5) 「ネイティブ・アメリカン知識人」とは、広い意味で「汎ネイティブ・アメリカンの考えをもち、(特にローカルレベルでの) リーダーシップを持つ」ネイティブ・アメリカン、もしくは「民族学、民族誌学としてのネイティブ・アメリカン研究に貢献する」ネイティブ・アメリカンとされている。Lucy Maddox, *Citizen Indians: Native American Intellectuals, Race and Reform* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2005). 勿論、ネイティブ・アメリカンと非ネイティブ・アメリカンの研究者の線引きも明確ではなく、ネイティブ・アメリカン研究者、メインストリーム研究者、海外の研究者の態度も一枚岩ではない。さらにロバート・アレン・ウォーリヤー (Robert Allen Warrior) 'そしてドナ・デイル (Donna Delyle) 'キャレン・スウィッシュャー (Karen Swisher) は、ともに「これらNAAの研究者間の交流の欠如と問題点を指摘している」。Robert Allen Warrior, *Tribal Secrets: Recovering American Indian Intellectual Traditions* (Minneapolis: University of Minnesota, 1995);

- Donna Deyhle and Karen Swisher, "Research in American Indian and Alaska Native Education: From Assimilation to Self-Determination," in Michael Apple ed. *Review of Research in Education* (Washington D.C.: American Educational Research Association, 1997), 113-194.
- (6) ネイティブ・アメリカン史研究理論に関する多くの研究を残すナンシー・シューメイカーは、「理論」を「経験に基づいた流動的解釈」「社会の実情を理解する上での解釈を導く適切な記述」もしくは「創造力を駆使しながら歴史の意味を再構築する仮説的記述」であると述べる。Nancy Shoemaker, *Clearing a Path: Theorizing the Past in Native American Studies* (New York: Routledge, 2002), viii.
- (7) *Ibid.*
- (8) Angela Cavender Wilson, "Grandmother to Granddaughter: Generations of Oral History in a Dakota Family," in Devon A. Mihesuah ed. *Native and Americans: Researching and Writing about American Indians* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1998), 27-36.
- (9) Tuhivai Smith, *Decolonizing Methodologies: Research and Indigenous Peoples* (Dunedin: University of Otago Press, 2004), このような歴史認識は「アメリカ合衆国におけるネイティブ・アメリカン史研究だけでなく、オーストラリア、ニュージーランドなど、世界的な先住民史研究者の間の議論の中での共通認識として発せられたものである」。
- (10) Philip Deloria, "Historiography," 9.
- (11) Kerwin Lee Klein, *Frontiers of Historical Imagination: Narrating the European Concept of Native America, 1890-1990* (Berkeley: University of California Press, 1997); Robert F. Berkhofer, Jr., *The White Man's Indian: Images of the American Indian from Columbus to the Present* (New York: Knof Doubleday Publishing, 1979); Brian Dippe, *The Vanishing American: White Attitudes and U.S. Indian Policy* (Middletown: Western University Press, 1982); Frederick Jackson Turner, *The Frontier of American History* (New York: Henry Holt, 1920).
- (12) Robert Bieder, *Science Encounters the Indian, 1820-1880: The Early Years of American Ethnology* (Norman: University of Oklahoma Press, 1986); Curtis Hinsley, *Savages and Scientists: The Smithsonian Institution and the Development of American Anthropology, 1846-1910* (Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press, 1981); Anthony Pagden, *European Encounters with the New World: From Renaissance to Romanticism* (New Haven: Yale University Press, 1993).
- (13) L.G. Moses, "Performative Traditions in American Indian History," in Philip J. Deloria and Neal Salisbury eds., *A Companion to American Indian History*, 193-208.
- (14) David Wilkins, *American Indian Politics and the American Political System* (Lanham: Rowman and Littlefield: Publishing Inc., 2002), 59, 225-34.
- (15) Robert F. Heizer, *The Destruction of California Indians* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1974).
- (16) Donald Fixico, *The American Indian Mind in a Linear World: American Indian Studies & Traditional Knowledge*

- New York and London: Routledge, 2003), 116.
- (17) *Ibid.*, 111.
- (81) Devon Abbott Mihesuah and Angela Cavender Wilson, *Indigenizing the Academy: Transforming Scholarship and Empowering Communities* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2004).
- (82) James Axtell, *The European and the Indian: Essays in the Ethnohistory of Colonial North America* (Oxford: Oxford University Press, 1981), 1-15; Bruce G. Trigger, "Ethnohistory: Problems and Prospects," *Ethnohistory*, 29 (1982), 1-19; Melissa L. Meyer and Kerwin Lee Klein, "Native American Studies and the End of Ethnohistory," in Russell Thornton, ed. *Studying Native America: Problems and Prospects* (Madison: University of Wisconsin Press, 1998), 182-216.
- (83) James Axtell, "The Ethnohistory of Native America," in Fricco ed., *Rethinking American Indian History*, 11-27.
- (18) Axtell, *The European and the Indian*, 2
- (82) *Ibid.*
- (83) Axtell, "The Ethnohistory of Native America," 16-19.
- (27) *Ibid.*, 19. またホスノホストローツは「ネーティブ・アメリカン史記知バンヘンダーの視点を取ら込メツルハナ」
- James Axtell, ed., *The Indian Peoples of Eastern America: A Documentary History of the Sees* (New York: Oxford University Press, 1981); Rayna Green, *Native American Women: A Contextual Bibliography* (Bloomington: Indiana University Press, 1983); Walter L. Williams, *The Spirit and the Flesh: Sexual Diversity in American Indian Culture* (Boston: Beacon Press, 1986).
- (25) Philip Deloria, "Historiography," 19.
- (82) Richard White, *Middle Ground: Indians, Empires, and Republics in the Great Lakes Region, 1650-1815* (New York: Cambridge University Press, 1991); James Merrell, *Indians' New World: Catawbas and Their Neighbors from European Contact through the Era of Removal* (Chapel Hill: University of North Carolina Press for Institute of Early American History and Culture, 1989).
- (25) Stephen Krech III "State of Ethnohistory," *Annual Review of Anthropology*, 20 (1991), 345-75.
- (83) Shoemaker, *Cleaning a Path*, viii; Robert F. Berkhofer Jr., "The Political Context of a New Indian History," *Pacific Historical Review*, 40, 357-382.
- (83) Patricia Nelson Limerick, *The Legacy of Conquest: The Unbroken Past of the American West* (New York: W. W. Norton & Co., 1987), Patricia Nelson Limerick, Clyde Milner III and Charles E. Rankin, eds., *Trails: Toward a New Western History* (Lawrence: University Press of Kansas, 1991), xi.
- (86) Berkhofer, "The Political Context of a New Indian History," 357.
- (25) *Ibid.*, 30-39; Patric M. Malone, *The Skulking Way of War: Technology and Tactics among the New England Indians* (Madison Books, 2000); Anthony McGinnis, *Counting Coup and Cutting Horses: Intertribal Warfare on the Northern*

- Plains, 1783-1839* (Boulder: Johnson Books 1990); Robert Doherty, *Disputed Waters: Native Americans and the Great Lake Fishery*.
- (82) Hagan, "The New Indian History," in Fixico, ed., *Rethinking American Indian History*, 30.
- (83) Devon A. Mihesuah, *Native and Academics: Researching and Writing about American Indians* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1998), 1-22.
- (84) *Ibid.*
- (85) Fixico, *The American Indian Mind in a Linear World*, 32.
- (86) Albert Memmi, *Racism* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2000); Samir Amin, *Eurocentrism* (New York: Monthly Review Press, 1989).
- (87) Stefano Varese, "Witness to Sovereignty: Essays on the Indian Movement in Latin America," (Manuscript submitted for publication to The University of Oklahoma Press, 2003); Cook Curtis, and Juan D. Linda, *Aboriginal Rights and Self-Government* (Montreal: McGill's Queen's University Press, 2000); Arturo Escobar, *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World* (Princeton: Princeton University Press, 1995); Kuniko Noguchi, "Globalization of Indigenous Movement," unpublished report in Native American Studies, University of California, Davis (2005).
- (88) Smith, *Decolonizing Methodology*, 42-53.
- (89) Ines Hernandez Avila, *Reading Native Women: Critical Creative Representations* (Walnut Creek: Altamira Press, 2005); Steven J. Crum, *The Road on Which We Came: A History of the Western Shoshone* (Salt Lake City: University of Utah Press, 1994) (著者編訳三語『ヘネシカ先住部: ハネズメ・シメ・シメの歴史』《岩石書庫》二〇〇一冊)。
- (40) Elizabeth Cook-Lynn, *Aurelia: A Crow Creek Trilogiy* (Colorado: University Press of Colorado, 1999); Vine Deloria, Jr., *Spirit and Reason, Vine Deloria, Jr., Reader* (Colorado: Fulcrum Publishing, 1999); Craig S. Womack, *Red on Red: Native American Literary Separatism* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1999).
- (41) Edward Charles Valandra, *Not Without our Consent: Lakota Resistance to Termination, 1950-59* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2006).
- (42) Fixico, *The American Indian Mind in a Linear World*, 1
- (43) Peter Nabokov, *A Forest of Time: American Indian Ways of History* (Cambridge: University Press, 2002), vii.
- (44) Andy Smith, "Christian Conquest and the Sexual Colonization of Native Women," in Carol J. Adams and Marie M. Fortune, eds., *Violence against Women and Children: A Christian Theological Sourcebook* (Continuum International Publishing Group, 1996); ノー・イシカワ・デボン・ヘネシカンの世界観と女性との関わりをめぐって Devon Abbott Mihesuah, *Indigenous American Women: Decolonization, Empowerment, Activism* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2003); Kim Anderson, *A Recognition of Being: Reconstructing Native Womanhood* (Canada: Sumach

- Press, 2000); Lee Maracle, *I Am Woman: A Native Perspective on Sociology and Feminism* (Canada: Press Gang, 1996).
- (45) *Ibid.*
- (46) 一方、数少ない一四九二年以前のネイティブ・アメリカン史として、ZARAの研究香波歴史家のシヤック・フォーブス (Jack Forbes) は、『*Discovery of America*』の中で、北アメリカの「先住民」対西洋諸国の関係を論じている。Jack D. Forbes, *The American Discovery of Europe* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2007).
- (47) *Ibid.*
- (48) Eric R. Wolf, *Europe and the People without History* (Berkeley: University of California Press, 1982); Richard White, *The Roots of Dependency: Subsistence, Environment, and Social Change among the Choctaws, Pawnees, and Navajos* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1983).
- (49) Pauline Turner Strong, "Feminist Theory and the 'Invasion of the Heart' in North America," *Ethnohistory*, 43 (1996), 683-712; Daniel K. Richter, "Whose Indian History?" *William and Mary Quarterly*, 50 (1993), 379-393; Linda Smith, *Decolonizing Methodologies*; Devon Abbott Mihesuah and Angela Cavender Wilson, *Indigenizing the Academy*.
- (50) Philip Deloria, *Playing Indian* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1999); Sandy Grande, *Red Pedagogy, Native American Social and Political Thought* (Rowman: Rowman & Littlefield Publishers, Inc, 2004).
- (51) *Ibid.*, 91-121.
- (52) Alfred Taikaki, *Peace Power Righteousness: An Indigenous Manifesto* (Canada: Oxford University Press, 1999), 53-69.
- (53) Jack Forbes, *Native Americans of California and Canada* (Naturegraph Publishers, Inc.: Happy Camp, California, 1991), 171-179; Stefano Varese, "Think Locally, Act Globally," Report on the Americas: *The First Nations*, vol. 25-3 (December 1991), 13-17.

(本学兼任講師)

# Concepts in Native American History: the Alternatives to the Old Indian History.

by NOGUCHI Kumiko

This paper is presenting the current arguments among Native American history concerning the theories of history writings, their purpose, limitations, and possibilities. Since 1960s when the 'old Indian History' started being revised, Native American history has been struggling to find effective approaches or theories to write the new Indian history. The revisionists' efforts started by reviewing "resources" of history writing which used mostly depended on only written documents. Then scholars have considered how to use the native voices to write Native American History and who could participate in those processes as history researchers. In order to explain these arguments, this paper introduced the discussions of Ethnohistory, New Indian History, and Native American Studies to write Native American history writings as alternatives to 'old history.'

北米ネイティブ・アメリカン史研究における理論の変遷と模索（野口）